

幕末とは、一般的にペリーが来航した 1853 年から、元号が明治となった 1868 年までの約 15 年を指す。

日本が世界に門戸を開いた 19 世紀半ばは、欧米列強によるアジア進出が進められていた時期であり、同時に、ヨーロッパでは写真技術の普及期に当たっていた。

日本の世界デビューの様子は外国人写真家によって記録された。そこで写されたのは「文明開化」以前の日本の風景と人々の姿であった。

カメラがヨーロッパで発明され、日本に伝わってきた時期と、日本の幕末・明治という激動の時代が偶然重なった。それによって、時代の人物、事件、戦争、風景、町並み、風俗、建築、などが様々な視点から記録された。それらの写真は、眼で見る歴史を今に伝えている。

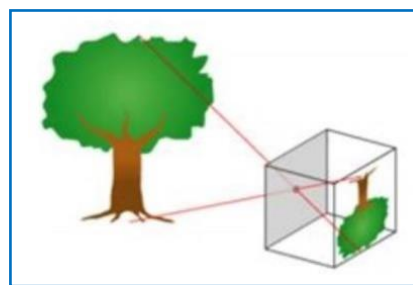
前回のテーマは、絵図・浮世絵を通して見た横浜開港だったが、今回は、「幕末、カメラはどのような日本を写し出したのか」その一端を紹介したい。

その中で、F. ベアトという写真家にも焦点を当てて伝えたい。

## 1. 写真が生まれ日本に伝わった

### ① カメラの始まりから今まで

- ・ 暗い部屋の穴から差し込む光が、反対側の壁に外の景色を映し出す。この現象は、「ピンホール現象」とよばれ、紀元前の昔から知られていた。
- ・ 16 世紀中頃には、小穴にレンズをはめて鮮明な映像を得る方法が発見されてスケッチや測量に使われ、当時の画家達は下絵を作るのに利用した。この現象を利用して作られた「**カメラ・オブスキュラ**」と呼ばれた装置がカメラの原点と言われている。(ラテン語で「暗い部屋」)



ピンホール現象 (Wikipedia)

写真の歴史は、写した映像を定着させる感光剤の発見の歴史だった。

- ・ 1839 年 **銀板写真** (感光材料に銀を使った写真術) が仏で発明される
- ・ 1851 年 **湿板写真** が英で発明 (ガラス板に感光剤を塗る)

幕末に写された写真は、主に銀板、湿板であるが、露出時間が長く、高度な知識と複雑な手順を必要とした。

- ・ 1871 年 **乾板** が登場 (明治 4) (英)、新しい感光剤による
- ・ 1889 年 **ロールフィルム** 登場 (明治 21)
- ・ 1945 年～ **二眼レフ、インスタント、ポラロイド、一眼レフ、カラー写真** 登場
- ・ 20 世紀末、デジタル技術が発達、今では誰でも簡単にデジタルカメラやスマートフォンで写真や動画が撮れる時代となった。

## ② 日本に伝わる

銀板写真が発明されたのは1839年だが、その4年後1843年にはオランダ船によって長崎に日本最初の写真機材が持ち込まれている。

1848年(嘉永元年)写真が伝わる。カメラは薩摩藩の藩主・島津斉彬に献上され、写真に大変興味を持った斉彬は、写真機材の研究を家臣に命じた。

日本人によって写された写真で、現存する最古の銀板写真は、1857年(安政4)に写された島津斉彬の銀板写真(重文)である。



島津斉彬 (尚古集成館)

## 2. 黎明期の写真家たち

幕末、日本で写真を撮った外国人は、1854年ペリーに随行してきた写真家をはじめ、外交使節団の随行カメラマン、また、報道関係で派遣されて来日した写真家、長崎出島の蘭方医などだった。史料に残っている写真家のうち、主な人物を見ていきたい。

### ・ ピエール・ロシエ (1829-?) スイス生まれの写真家

1859年、横浜開港と同時に英総領事オールコックと共に来日。

上野彦馬に写真術を教える。

### ・ ウィリアム・ソンダース (英) 1862(文久2年)来日

横浜に滞在し、3カ月間、横浜、江戸とその周辺の各地を撮影。

\*1863年(文久3年)になると 居留地に写真館を構え、肖像写真の撮影に応じながら、そこを基地として日本各地を撮影するカメラマンが出現する。彼らは、その成果を世界で販売したり、絵入り新聞や書籍の挿画の素材として提供した。

### ・ チャールズ・パーカー (英) 1863年来日

### ・ フェリーチェ・ベアト (1834-1909) (英)

1863(文久3年)来日

幕末の日本を写した写真家と言えばこの人、という位よく知られている。

中東、インド、中国で撮影、第二次アヘン戦争などの戦場を記録する写真家として活躍。画家・チャールズ・ワグマン(L.L.N と特派員契約を結んでいた)に続いて来日(29歳)、横浜居留地で写真館を開いた。

横浜を拠点に江戸・長崎など各地で風景や風俗を撮影。

21年間横浜で暮らした。50歳で離日、77歳没。

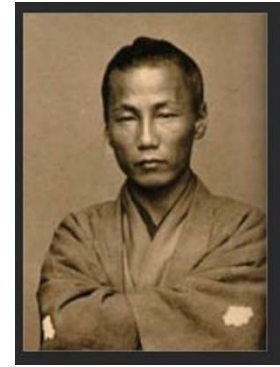
ベアトの作品については、この後、別項目を立てて紹介したい。



フェリーチェ・ベアト (横浜開港資料館)

・ 上野彦馬 (1838-1904)

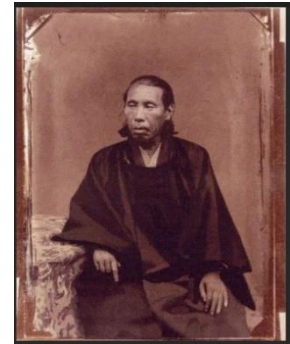
科学者でもあった長崎の上野彦馬は、最新式の湿式写真の技術を独自で学んだ。ピエール・ロシェからも学び1862年(文久2)写真館を開設。日本の写真の祖として知られ、日本最初の戦場カメラマンでもあった。



上野彦馬 (幕末写真の時代)

・ 鶴飼玉川 (1807 文化4-1887 明治4)

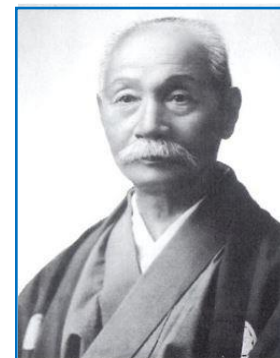
開港直後の横浜で、アメリカ人雑貨商フリーマンに写真術を学び、1861年、江戸薬研堀で写真館「影真堂」を開業。最初の商業写真家。



下岡蓮杖(幕末写真の時代)

・ 下岡蓮杖 (1823-1914)

伊豆下田の生まれ、狩野派の門に入り日本画を学ぶ。1863(文久2)、ジョン・ウィルソン (1861(文久元年)来日)の機材を譲り受け横浜で写真館を開業した。上野彦馬と共に「写真の開祖」といわれる。(馬車道には蓮杖の顕彰碑が建つ)



日下部金兵衛(幕末写真の時代)

・ 日下部金兵衛 (1841-1934)

ベアトの門下、「横浜写真」と呼ばれる手彩色写真を手掛ける。

長崎出島の蘭方医たちが、科学として伝えた「湿板写真術」を表現技術としての「写真術」に膨らませたのは、外国人写真家たちの功績と言える。

上野彦馬や下岡蓮杖、日下部金兵衛が登場する背景には、ベアト、ロシェ、ウイルソン達の活躍があった。

### 3. 幕末のポートレート

江戸時代末期の日本では、「写真」は驚きの西洋技術だったに違いない。

「写真を撮られると魂が抜かれる、寿命が縮まる」という迷信が生まれた程である。幕末のポートレイトの多くは、各地に生まれた営業写真館を中心に撮影されている。勿論、都市部に限られて、対象は日本人では各藩の大名や武士が多い。

開港の年、安政6年の松来広安(のちの寺島宗則)の書簡には、早くも

「横浜ニ写真ヲ為す洋人来レリ」という記述があり、翌年の万延元年の川本幸民の書簡にも、「此ごろ横浜へ米人ニテ右模写を致し、代金を定居候もの有之よし承候間、近日写されに参り度心組ニ御座候」という記述がある。

湿板法は撮影から仕上がりまで 2~3 時間がかかる。露光時間は 20 秒位。OK が出るまで動いてはいけない、瞬きも出来ない。(その為、一様に無表情で固い顔をしている) 顔や体が動かないよう、後ろから支えるための器具「首押さえ」があった。

## 4. 攘夷事件

1853 年(嘉永 6)の黒船来航により日本は開国へと大きな転換期を迎えていた。尊王攘夷運動が高まり、開港直後の横浜では外国人殺傷事件が多数発生する。ベアトを始めとして、彼らは幕末・維新期の事件を記録した。彼ら自身が攘夷の標的にされかねない危険の中、歴史を映像化したのである。

数多い攘夷事件の内、いくつかを時系列でみてみよう。

### ①東禅寺事件 (1861 年文久元年)

文久元年 5 月、江戸高輪に置かれていた英公使館が攘夷派浪士に襲撃された事件。公使オールコックは危うく難を逃れたが、書記官等が負傷した。

事件後、オールコックは幕府に対し厳重に抗議し、イギリス水兵の公使館駐屯の承認、日本側警備兵の増強、賠償金 1 万ドルの支払いという条件で事件は解決をみた。この事件の後、**英国艦隊の軍艦が横浜に常駐**するようになった。



東禅寺事件の図(The Illustrated London News)

### ②ヒュースケン殺害事件 (1861 年万延元年)

ヘンリー・ヒュースケンは、安政 3 年(1856) からアメリカ公使、タウンゼント・ハリスの秘書兼通訳を務めていたが、攘夷派の薩摩藩士らに襲われ翌日死去。幕府は、ヒュースケンの母に 1 万ドルの弔慰金を支払い事件を落着させた。ヒュースケン是有名人であり、事態を重く見た幕府は、外国人警護に努めたが、その後も外国人に対する襲撃事件は続いた。



外国人の警護 (ライデン大学コレクション)

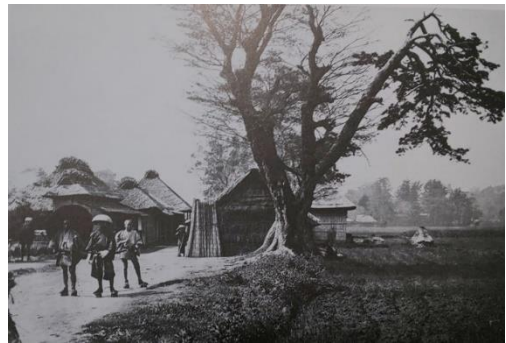


### ③生麦事件（1862年 文久2）

生麦村(鶴見区)で発生した薩摩藩士によるイギリス人殺傷事件。

1860年(安政7)には桜田門外の変が起こり、その2年後に起こったのが生麦事件であった。横浜で発生した事件だが、その後の日本の歴史に影響を与えた。

攘夷から討幕運動へと明治維新の大きな転機となった事件である



生麦事件現場（ペイト写真集）

#### 経緯

チャールズ・リチャードソン（英国人商人）が友人と4人で川崎大師へと向かう途中、生麦村で島津久光の行列と遭遇し、薩摩藩士に無礼討ちにされる。

リチャードソンは絶命、他の2人は重傷を負った。

この時、奈良原喜左衛門に切られたリチャードソンに止めを刺したのが、薩摩藩士・海江田信義(30歳)であった。

(奇しくも、2年前に起こった桜田門外の変で井伊直弼の首級を上げたのが、海江田信義の弟、有村次左衛門(22歳)で、その兄の有村雄助(26歳)も参加していたのである)

#### 結果

この事件は大きな外交問題に発展した。

この時、イギリスは幕府と薩摩藩に巨額の賠償金と犯人の引き渡し・陳謝を要求、これを拒否した薩摩藩との間で、翌年、鹿児島湾において薩英戦争が勃発した。戦争は大規模なもので、イギリス軍63名、薩摩藩17名の死傷者を出した。

その後、薩摩藩は講和交渉を通じてイギリスと急接近し、これが討幕にも大きな影響を与えたと言われている。また、長州藩も下関において英、仏、米、蘭の連合艦隊と戦ったが、戦後、攘夷の方針を転換した。



薩摩藩・佐土原藩の藩士達（同上）

\*この事件が他の外国人殺傷事件と違って歴史的な大事件とされているのは、大名行列が原因で起きた事件であり、後の薩英戦争の原因となったからであった。

### ④鎌倉事件（1864年 元治元年）

相模国 鎌倉郡 大町村（現在の 鎌倉市 御成町）でイギリス人 士官 2名が日本の武士に斬殺された事件である。当時横行していた外国人殺傷事件の中で犯人が逮捕、処罰された初の事例とされる。

下手人は捕らえられ、横浜戸部の刑場において斬首される。もう一人は横浜市中引き回しの後、戸部でイギリス守備隊の見守るなか斬首、吉田橋にて晒された。

\* 幕末は全体的に「攘夷の時代」というイメージだが、その時期により様相は異なる。

#### 「開港後の情勢の変化」

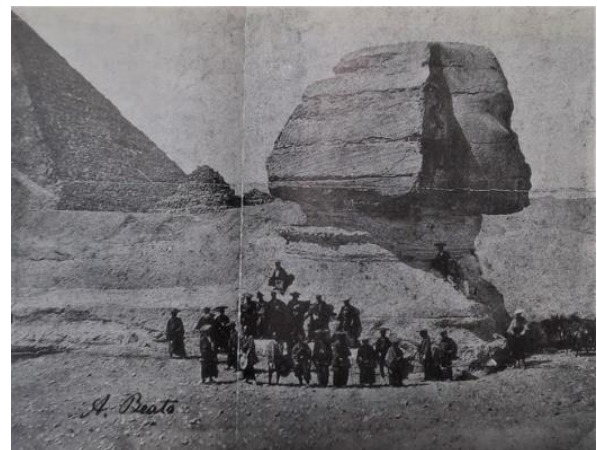
- ① 開港直後(1859-1861) 攘夷の勢いはまだ強くない
- ② 文久期の攘夷の高まり(1861-1864) 外国人殺傷事件が多数発生  
(1861 東禅寺、ヒュースケン事件、1862 生麦、1864 鎌倉)
- ③ 攘夷の収束(1864-1868) 下関戦争をきっかけに外国人を取り巻く治安は改善

## 5. フェリーチェ・ベアトの眼

こうした攘夷の嵐が吹く1863年にベアトは来日。日本に来たカメラマンの中でも、ベアトは優れたセンスと技術を持ち、多くの作品を残した。横浜に写真館を開き、外交官や軍人の肖像写真を多数撮影、販売し、商人たちの撮影依頼にも応じた。ベアトは、横浜を拠点に江戸・箱根・長崎など各地で風景や風俗を撮影した。外国人に制限されていた遊歩区域外での撮影は、外交特権を持つ外交官の随行員の名目で行った。

### ・「スフィンクスと侍」

スフィンクスを背景にした侍の写真、1864年の幕府の第二次遣欧使節団の一行。1860年(万延元年)の遣米使節をはじめ、日本人の世界デビューと言う歴史的な出来事を記録した写真は多いが、スフィンクスと侍の取り合わせという、これほど印象深い映像は他に例を見ない。



スフィンクスと侍 (ライデン大学コレクション)

・ベアトの日本での写真は、風景写真と風俗写真に分かれる。

### ①風景

開港後の横浜風景、江戸の街並み、鎌倉風景、箱根、長崎の写真などを多く残している。それらは、今日では大変貴重な歴史資料となっている。



横浜開港場の写真 (横浜開港資料館)

しかし、ベアトの風景写真には、市街地よりもむしろ田園や山・海が多く、木と水が主なモチーフとなっている。そして、その写真には、単なる記録ではなく、ベアト特有の美意識が表れている。

欧米の研究者は、ベアトの写真の絵画的要素について浮世絵の影響を見たがるが、開港資料館の齋藤多喜夫氏は「むしろ、イギリスの水彩画の伝統に着目すべきではないか」と述べている。



山手より吉田新田を臨む (ベアト写真集)



箱根宿 (ベアト写真集)



芝高輪の薩摩藩下屋敷 (ベアト写真集)

## ②風俗・人物

様々な職業の人(職人尽し)、市井の人々、女性、子供などを撮影している。



酒匂川の蓮台渡し (ベアト写真集)



農家の子供たち (ベアト写真集)



茶器を持つ女 (ベアト写真集)



\*ベアトは、明治5年(1873)以降、写真から離れ、写真館を手放すのは明治10年、その後、実業家に転向。明治16年(1884)、それまで21年間暮らした横浜を離れ出国した。また、下岡蓮杖は、明治9年頃、東京に移住して、やはり写真から遠ざかっていく。このようにして、幕末、写真の黎明期に活躍した人たちは去り、その後、彼らの弟子たち、新しい写真家たちが輩出していくことになる。

## 6. もう一人の写真家

・チャールズ・ウィード (1824-1903) (米)

慶応3年(1867)明治になる前年来日。

1年間滞在したカメラマンで、横浜・鎌倉・江戸・長崎を撮影した。

「マンモス・プレート」という大型のカメラを使い、スケール感のある風景写真を写している。それは、大判のガラス板(43cm×53cm)をネガとする写真で、ネガが大きいため画像が非常にシャープである。

残った写真が少なく、ウィードは長い間「幻の写真家」と言われていた。しかし、2021年(令和3)31枚の写真が発見されたのである(岡山洋二氏蔵)。



マンモス・プレートカメラ  
(横浜開港資料館)

\*初めに述べたように、カメラがヨーロッパで発明され、日本に伝わってきた時期と、日本の幕末・明治という激動の時代が偶然重なった。それによって、幕末と言う時代が記録され、それらの写真は、眼で見る歴史を今に伝えている。

今日の私たちから見ると、これらの写真は、当時の日本の風景や人々の生活の様子を知る貴重な歴史資料となっている。

それは、外国人の眼でとらえられた日本の原風景だった。それらの写真を見ると、150年前と言うのは、そう遠い昔ではない、と感ずることが出来る。

参考文献：

- ・『ライデン大学写真コレクション』 朝日新聞社 1987
- ・『幕末 写真の時代』 ちくま学芸文庫 小沢健志編 1994
- ・『幕末明治 横浜写真館物語』 斎藤多喜夫 吉川弘文館 2004
- ・『F.ベアト写真集』 横浜開港資料館 2006
- ・『幻の写真家 チャールズ・ウィード』 横浜開港資料館 2023